

## CSO アワード 2016「大阪市長賞」受賞記念

「NPO 法人子どもデザイン教室」代表理事 和田 隆博さんと谷川市民局長との対談  
(平成 29 年 2 月 15 日 大阪府役所本庁舎にて)



### 人生をやり直し世の中のために生きてみよう

—活動のきっかけについてお聞かせください。

【和田氏】

元々、私はグラフィックデザイナーの仕事をしておりまして、「悪いことは言わない」「良いことはものすごく良く言う」というような広告の仕事が、世の中の役に立っているのかという疑問があり、「何か世の中の役に立つことができないかな。」と思って過ごしていました。41歳の時に病気をしまして、医者にもう少しで死ぬところでしたよって言われるところまでいったんです。その時、病院の先生から、「これまでの人生を振り返って、これからの人生を生きなおしてみませんか」と言われました。そして、たまたまその年から大阪市扇町総合高校と大阪市立デザイン教育研究所で先生を始めることになったんです。これまで、教育とは全く無縁の生活を送っていたので、目に見えて技能を身につける子どもの成長ってすごく面白いなと思いました。そして、こうした子ども関係の活動をしようと思ったときに、たまたま事務所の近くに「聖家族の家」という児童養護施設があって、そこで親と暮らせない子どもたちの存在を知って「何かを教えるのであれば、より困難を抱える子どもたちを教えたい」と思い立ったのが、この活動を始めたきっかけですね。

【谷川市民局長】

より困難を抱える子どもたちを教えたいということですが、どのような困難を抱えているのでしょうか。

【和田氏】

さまざまな理由で親と暮らせない子どもたちは、頼れる身寄りが少なく、資金も、知識も少ないまま、概ね 18 歳で自立を余儀なくされています。こうした子どもたちには、「どうせ私なんか」みたいな自己肯定感が低い子が比較するとやっぱり多いんですね。だからこそ、「そもそもの物事を学ぼうとする力＝生きる力」を育てることが大切だと考えているんです。

【谷川市民局長】

子どもたちは色々な可能性を持っているので、可能性をどう引き出していか。そして、それが伸びて形になって見えてくると、やりがいを感じますね。貧困などの環境の中に育っている子どもたちも同じような可能性を秘めているので、環境に左右されないような教育の条件を作り上げていくことが大事なんでしょうね。そういう子どもたちにもしっかりと機会を提供していただくというすばらしい事業をされていると思っています。



【和田氏】

貧困などの子どもたちが置き去りにされているところがあると思います。その子たちに注目し、社会に送り出していきたいと思っています。

親と暮らせない子どもたちが「生まれてきてよかった」と思える社会にするために  
—具体的な活動の内容についてお聞かせください。

【和田氏】

子どもの生きる力を育てるため、幼稚園から高校生までの子ども、とりわけ児童養護施設や里親宅で暮らす子どもへのデザイン教室を行っています。この教室では、自ら創案したキャラクター商品を1年かけて制作し、自ら販売するんですね。普段の勉強では会得できない創造力・努力・対話力を遊び感覚で身につける、つまり、「遊びの中に学びがある」、しかもそれを計画的に進めていく、これがデザイン教育なんです。

【谷川市民局長】

企業と連携した取組もされておられると聞いています。そちらもお聞かせいただけますか。



【和田氏】

子どもデザイン教室のレッスンを通して向上した子どもの技能と企業の民間活力を活かして、親と暮らせない子どもたちの自立支援、学習資金を創出することに取り組んでいます。親と暮らせない子どもとプロのデザイナーが共創したグラフィックデザインを、企業のキャラクターマークやイラストとして企業に販売し、その利益で親と暮らせない子どもの自立資金と学習資金を創出しています。この取組を私たちは「こどキャラ」と呼んでいます。



「こどキャラ」

—活動の際、大切にしていることについてお聞かせください。

【和田氏】

レッスンに関しては「自分デザイナーを育てる」ことがコンセプトです。自分の人生・将来を主体的に設計していけるような子どもになってもらえたらなと思っています。そのために、上から目線で教えるのではなく、その子たち自身が自発的に頑張ろうとか、学ぼうという思いを持ってもらえるように、お仕着せとか型にはめて上から引っ張り上げるのではなく、横から一緒に上がろうかみたいなスタンスを大事にしています。児童養護施設や里親宅で暮らす社会的養護下における子どもたちには自己肯定感が比較的に低い子が多い中で、そういった子どもたちの作品が、企業などに取り上げられて世の中に出ていくことで、すごく生きる自信になっているというか、生きる力に繋がっているなと思いますね。

【谷川市民局長】

スポーツだけでなく、美術とかデザイン、いろんな分野でいろんな可能性を持っている子どもたちの能力を、いろんな分野で引き出してあげる。そういう取組が社会において必要なんでしょうね。「こどキャラ」のように、「本当に社会に役立っているんだ。」と子どもたちが体感できる取組は素晴らしい。自らの存在がしっかり認められ、社会に役に立っているということが目の当たりにできるような取組ですね。スポーツでは、なかなかこういうことは体験できないですね。社会に認められるということで、社会というものを、より身近に体感できることに繋がっていると思うんですね。

【和田氏】

私たちは、社会体験をしてもらうということを大事にしているんですね。いずれ子どもたちは大人になったときに、何らかのお仕事に就いて、モノを作ったり、サービスを提供したり、人と関わっていく。

そういうことを小さいうちから自然と体の内側から感じ取ってほしいと思っています。そこで、今年特に力を入れているのが、セレッソ大阪との協働です。J1の試合開催日にブースをお貸しいただき、そこで子どもたちと考えた商品やサービスを売り、その売り上げを子どもたちのお小遣いにするという取組をしているんです。去年の8月に1回やったのですけれども、「いくら儲かるやろう!？」と、子どもたちは言っていたのですけれども、結局は5,000円の赤字になったんです。でもそれで、「何であかんかったんやろう?」「天気が悪かったから?」「声掛けがたりなかったのかな?」とか、子どもたちなりに考えているんです。そのときは、練乳を凍らせてかき氷にして売ったのですが、子どもたち、えらいなと思ったことがあるんです。「たかさん(和田氏の愛称)が買ってきた値段(仕入れ値)が高かったからじゃないか」と、ある小学生の子が言うんですね。子どもたち、面白いなと思って。次は仕入れのないものにしたらいかな、というようなことを言い出すんです。で、次はダンボールでゲームを作ったら、全部小遣いになるからもっと儲かるんじゃないかと。これがすごく良いことだと僕は思っているんです。



当日の出店の様子



こどキャラかき氷

#### 【谷川市民局長】

今のお話を聞いて思いましたのが、教科書で学ぶよりも、実体験をすることによって、はるかに学習しているんじゃないかな、ということですね。「何でこうだったんだろう。」「次はこうしよう。」というのも、「デザインカ」のひとつの表れなのかなという感じもしますね。

#### 【和田氏】

アートと違ってデザインというものは常に相手がいる、つまり主体は他者なんです。社会があって社会のニーズを満たすものを生み出していかないと、答え・結果が得られないという所を知ってほしいなと。そのためにはきちんと話ができないといけないし、計算だって必要になってくる。その結果としてやっぱり国語とか算数とか勉強が必要なんだというのは、その後で気づいてもらえたらいいという風に思っています。

#### 【谷川市民局長】

押し付けとか義務で学習するよりも、まず、必要性をわかってもらった上でやる方が、吸収力も変わってくるんじゃないかな。

【和田氏】

「子どもにお金儲けのことを考えさせて。」という考え方もあるかもしれませんが、僕はそこが大事なんじゃないかなと思っています。子どもはおとなの未熟版、純粹版ではなくて、子どもは子どもとしていつも完成している。その子が大きくなったとき、経済社会の中で生きていくわけですから小さい頃からの経験は大事なんじゃないかなと。

【谷川市民局長】

生活する上で必要不可欠なところがありますので、そういう生活力の一番の根本みたいところをしっかりと植えつけ、社会における存在としてしっかりと生きて、なおかつ社会に還元する。そういう人材を育成するのが教育んじゃないかなと思いますね。

【和田氏】

児童養護施設の子どもたちは、概ねほとんどの子どもが18歳で施設を出ないといけないんですね。そうするといきなり一人で生活しないといけない。お金も稼がないといけない。頼る人もいない。という風な状況の中であって、自分からより良くしていこうという力が、こういうことを機会に体験していく中で、色々、創造力なり対話力なりを養ってってもらえたらなあと思っています。

### 地域や企業などが一緒になって支え合える社会に

【和田氏】

もう一つ言うなら、行政だけに頼るのではなく、民間なり地域で、何とか自助というか助け合ってやっていく。しかもボランティアではなく、あわよくばソーシャルビジネスとして楽しんで、収益も上げられるようになれば、すごいかなと。



【谷川市民局長】

行政の職員だけでできることは本当に限られています。いろんな分野のいろんな人材が地域社会の中にはおられますので、活動がしっかりできる環境を、お金の面だけに限らずいろんな面でサポートさせていただくことが、これからの行政の役割になっていると思いますね。それと、事業自体が持続していくためには、ボランティアだけでということになると、どこかで限界がくるのかもしれない。持続性とか継続性といった視点から考えていきますと、企業の皆さんと連携しながら事業化していくという発想が大切になってきますし、いろんな分野でそういう事ができていくことによって、社会全体の力になっていくというのがあるのだと思いますね。

【和田氏】

大阪は児童虐待がすごく多いんですね。都会だからという話もあるんですが、東京は大阪ほど多くないですね。里親委託率は大阪がすごく低い。人情の街といつつ、そうでもない部分もあったり

て。そういった中で、大阪ガスさんですとか、551の蓬莱さんとか、阪急阪神百貨店さんとか、大阪を代表する企業さんが支援しましょうと乗り出してきているので、大阪の企業が連携して、例えば児童養護問題ですとか、大阪の深刻な問題である子育てとかを活性化していけたらなあと思っています。

【谷川市民局長】

企業の皆さん方も一緒にやっという思いを出していただけるのは、非常に良い流れだと思いますね。

【和田氏】

大阪ガスさんも、電力・ガス自由化で大変な競争社会になって、そんな中で社会貢献をいかにするかが大事なのではないかと思います。私たち消費者がいずれかの企業を選ぶときに、条件が同じなら、より社会貢献をしている企業を選ぶという動きがあって、大阪ガスさんも非常に積極的に社会貢献事業をされてますね。

【谷川市民局長】

まさに、企業にとっても社会貢献するという事が価値になってきている。そういう時代になってきているということなんです。



【和田氏】

子どもの絵を使うことで、注目度が上がるんです。素晴らしいプロの絵もいいんですけど、子どものユニークな絵も注目度は高いと思います(笑)。

【谷川市民局長】

確かに目に留まりますよね。「何これ？」というようにね(笑)。

【和田氏】

だれも損しないんです、このシステムは。自分で言うのもなんですけれども、上手いこと考えているなと思っています(笑)。

【谷川市民局長】

確かにWIN-WINですよ。

【和田氏】

企業さんも、広告に社会貢献にうまく利用して下さったらなと思っています。

―地域に根ざして活動されていく中で、地域との連携についてお聞かせください

【和田氏】

レッスンをずっとやっている中で、一般家庭のお子様に対しては有料でレッスンをしてるんですけども、その中で親御さんと色々お話をさせていただいていると、親御さん自身も地域の一員として何か共有したいというお話がちょこちょこ出てきているんです。単なる塾とかそういうのではなく、皆が1つの社会を良くしていこうみたいな志があって、そういう機運が盛り上がってきているので、そういう流れがあちらこちらに、もちろん既に生まれていますけど、もっともっと広がってほしいなど。

【谷川市民局長】

やっぱり、教室の近くの東住吉区山坂付近の子どもが多く通われているのですか？

【和田氏】

そうですね。ただ、去年くらいから、堺の方から来られたり、平野の方から来られたり、広がり始めています。

【谷川市民局長】

教室は火・木・土ですよ。週3日だと大変ですね。

【和田氏】

楽しんでやっておりますから、しんどくはないですね。もともと、徹夜続きのデザイナーだった頃の苦勞を思えばあまり苦になりません(笑)。

【谷川市民局長】

大阪市立デザイン教育研究所、大阪市立扇町総合高校の講師もされているとのことでしたが、学生さんにも、こういう取組のお話をされたりするのですか？

【和田氏】

大阪市立扇町総合高校の吹奏楽部オーギーズさんは、数々の受賞経験があって優れた演奏が魅力なんですよ。一緒に阪急百貨店さんに行って、最初に私がお話して、吹奏楽部さんも演奏会をして、そうすると学生もスキルが磨かれますし、阪急百貨店さんも集客につながり、私はPRできると(笑)。宣伝ですが、今度3月5日の日曜日、14時から1時間、阪急百貨店うめだ本店の9階祝祭広場で演奏会があります。



【谷川市民局長】

まさに3者ともメリットがあるんですね(笑)。

―こどキャラ商品についてお聞かせください。

【和田氏】

このソース瓶の社長さんとは、大阪産業勸業展で知り合いになったんですけれども、「親と暮ら

せない子どもたちの支援をしているんです」というお話をすると、「ずっと、何か支援をしたいと思っていた。でも、どこにしたら良いかわからなかった。」と。多分、大阪の中小企業の、そういう熱い思いを持ったおっちゃん、おばちゃんたちは、数多くいてと思います。世の中のために何か支援したいと。どうせ広告会社に出すんだったら、こちらのこどキャラの方が世の中の役に立つと思っていただいているんです。これからの時代は広告と社会貢献、1粒で2度おいしいようなことが大事なんかなと思います。

【谷川市民局長】

先ほどおっしゃっておられた、綺麗な絵よりも、何これという、その感じがいいのかもしれないね。写真より、はるかに興味がわきますね(笑)。



### 次世代につなぐ。そのために、事業性を確立させていく。

—今後の活動展望についてお聞かせください

【和田氏】

やはり、次の世代を育てることですね。今は私たちがしていますけど、私たちだけで終わったら意味がないと。次の世代を育てていって、若い子たちが、そのまた次の世代を育てていくようになるように、思っています。今はまだ中学生とか高校生くらいなんですけれども、かなり素養のある子たちが育ってきていますんで、その中から何人かが、私に続いてもらえるように思っています。そのためには、事業性を確立させ、きっちりした収益システムを作っておかないといけない。ボランティアでいつまでもやっていく訳にはいかないですので、事業性・収益性の確立が非常に大きなテーマです。

今、大阪市の市民活動推進助成事業(※)にも選ばれてご支援いただいておりますので、この、いまの機運をここで確立させておいて、このチャンスを逃したらだめだと思っています。今まで、なるようになると思っていたんですけれども、ちょうど今年で10年ですが、初めて本当に緊張しています。

※市民活動推進助成事業

市民や企業等のみなさまからいただいた寄附金を活用し、市民活動団体が行う公益的な事業に対して助成を行っています。

【谷川市民局長】

まさにね、次世代にどう受け渡していくかですね。

【和田氏】

そこは事業性がついてこないダメかなと。NPOだからボランティアがいい、無償奉仕っていうのはちょっと違うと思うんで。霞を食って生きてはいけませんよね(笑)。



【谷川市民局長】

いかに事業化していくかっていうことですね。

【和田氏】

もう光は見えています。行けるぞっていう。もう1つ思っているのが、貧困家庭・母子家庭・父子家庭、そこのお子さんも同じような深刻な状態にありますんで、親と暮らせない子どもに絞るんじゃなくて、財政的に余裕が出てきたら、もうちょっと支援の輪を広げていって、貧困家庭・母子家庭・父子家庭のお子さんも支援の対象にできたらなと、そうやって活動の輪を広げて行きたいなという風に思っています。

でも、自分達だけでは限界があるので、事業性も確保できるならやってみようかなと思う人達が現れてほしいなと思っています。私たちは営利企業ではないので、ノウハウはいくらでも提供できます。障がいをお持ちの方のグループや、ご高齢の方のグループがやってくださっても構わないし、このモデルをいろんな方が使っていただいたら、そういった輪が広がって、より活性化していいのかなと思いますね。

【谷川市民局長】

是非とも、この事業を持続的な、またより多くの皆さんに知っていただけるよう、これからも頑張っていればと思っています。また、私どもも、しっかりと、できる限りのことを支援させていただきたいと思っております。



子どもデザイン教室